

厚岸の地衣類（要旨）

習志野市立習志野高等学校 志波 敬

地衣類とは樹皮などに着生している、菌類と藻類が共生した複合生物です。大気汚染等の環境の変化に非常に敏感で、わが国においては全国的に急速に減少してきており、自然環境が悪化している都市部のみならず、北海道のような自然環境の優れている地域に於いても地衣類は絶滅の方向に向かっています。今この時期に、厚岸の地衣類の分布を調べて記録しておくことは大切なことです。本研究では、自然環境の優れている厚岸およびその周辺地域に生育する地衣類の分類学的研究を行うとともに、生物指標種に関する基礎的データを得ることを目的としておこない、30科、58属、206種の地衣類を報告しました。愛冠にはカブトゴケ、ヨロイゴケ、アオキノリ、アワビゴケなど、わが国において現在急速に減少している葉状地衣類が見られました。これらの大型の葉状地衣を多産する環境は、落葉広葉樹が優先する自然林や、古い林分に限られています。大気汚染が少ないことに加えて、この森林には葉状地衣類が生育できる照度、温度、湿度その他の微妙な自然環境が確保されていると考えられます。厚岸湾をはさんだ尻羽岬も同様な傾向が見られました。これらの林は極めて希少価値があり、保全する必要があります。

また、末広付近の針葉樹林には大気汚染に最も敏感な種の一つであるナガサルオガセ (*Usnea longissima*) をはじめとするサルオガセ属が多く見られます。今後地衣類の絶滅危惧種の見直しがおこなわれる予定ですがナガサルオガセはいずれ近い内に絶滅危惧種となる見込みです。サルオガセは樹木に寄生して樹木を枯らすとの誤解がありますが、樹木に着生しているだけで養分は共生している藻類が光合成をおこない供給し、その他の養水分は雨や大気中から吸収しています。むしろサルオガセの存在は空気が綺麗であることの証明になります。現在、北海道においてすらナガサルオガセを多産する地域は急速に少なくなってきました。また、2000年に日本新産として霧多布周辺で発見され、アッケシサルオガセ (*Usnea fragilesceus*) と命名された種もこの地域にみられました。これらの針葉樹林も非常に優れた自然環境であり保全する必要があります。また、別寒辺牛湿原の海岸に近い部部においては、ワラハナゴケ (*Cladonia arbuscula*) が見られました。この種は極地や高山の地上によく見られるもので、湿原の海岸よりの地域は地衣類の分布からすると高山に近い環境ではないかと推測されます。別寒辺牛湿原の内陸部においては、タカネアカミゴケ (*Cladonia alpina*)、グレイジョウゴゴケ (*Cladonia grayi*) が見られました。タカネゴケは針葉樹林帯以上の、日当たりの良い地上によく見られます。グレイジョウゴゴケは平地から低山帯に見られます。このことから同じ湿原でも海岸沿いと内陸部では環境条件が多少違うのではないかと推測されます。これらの地衣類が生育できる高層湿原は急速に減少しつつあり、やはり保全をすべきであります。

以上のように、高山がないこの地域にこれだけ多くの地衣類が生育している厚岸の自然環境は極めて優れており、別寒辺牛湿原およびその周辺の自然を重要な地域として保全すべきです。